

キリスト教民主主義とヨーロッパ 1919-1948年

小 島 健

はじめに

1940-50年代のヨーロッパ統合に西欧諸国のキリスト教民主主義政党が積極的に関与したことはよく知られている¹⁾。例えば、1950年5月に欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）を提案したフランス外相ロベール・シューマン（Robert Schuman）は、キリスト教民主主義政党の所属であり、1951年4月にECSC設立条約に調印した6か国の外相は全員キリスト教民主主義政党に所属していた。さらに、1958年に発足した欧州経済共同体（EEC）の初代委員長はドイツのキリスト教民主同盟のウォルター・ハルシュタイン（Walter Hallstein）であった。また、ローマ教皇ピウス12世（Pius XII）も公にヨーロッパ統合を支持していた²⁾。

1950年代にECSC設立条約とEEC設立条約の批准が議会で提案された際に、各国のキリスト教民主主義政党は一致して賛成した。表1から50年代前半のECSC6か国の下院の勢力分布を確認しよう。なお、カッコ内はECSC6か国にスイス、オーストリアを加えた8か国の比率である。キリスト教民主党系は37.1%（37%）で第1党であり、第2党が19.8%（23%）の社会民主党系である。第3党は16.2%（14%）の共産党系、第4党が14.5%（12%）の保守ないしナショナリスト系、第5党が9.8%（12%）で自由党系であった³⁾。

1950年代にヨーロッパ統合を主導した政治勢力は、中道右派のキリスト教民主主義政党であった。今日のEUにおいて統合に積極的な中道左派の社会民主主義系の政党は、統合の初期には一致しておらず、むしろ懐疑的であった。社会民主党系のキリスト教民主主義政党とくにその中心となるカトリックに対する警戒感はつよく、例えば当時のドイツ社会民主党は統合に反対の姿勢であった。さらにフランスとイタリアで大きな勢力を持っていた共産党はモスクワ主導のコミンフォルムと結びついており、そもそも西ヨーロッパ統合に反対の立場であった⁴⁾。

ところが、これまで西欧キリスト教民主主義政党に関する研究は、日本はもちろんヨーロッパにおいても僅かであった⁵⁾。その理由としては、キリスト教民主主義政党を保守政党と同一視するかその代替物と見なして注目してこなかったことが挙げられる。また、その背景には、宗教を前近代的な近代民主主義とは相違するものとみる近代的理解があった。20世紀最高の宗教社会学者マックス・ウェーバー（Max Weber）の理解もとくにカトリックの前近代性を強調したので、カトリック政党を前身とするキリスト教民主主義政党に対する研

表1 西欧8か国下院議席数（1950年代前半）

国名	選挙年	共産党系	社会民主 党系	キリスト 教民主系	自由党系	保守・ナシ ヨナリスト	その他	合計
西ドイツ	1953	—	150	247	48	15	27	487
オランダ	1952	6	30	55	9	—	—	100
ベルギー	1954	4	86	97	25	—	—	212
ルクセンブルク	1951	4	19	21	8	—	—	52
フランス	1951	103	104	85	94	216	24	626
イタリア	1953	218	19	262	19	69	3	590
ECSC6か国合計		335	408	767	203	300	54	2067
比率 (%)		16.2	19.8	37.1	9.8	14.5	2.6	100
オーストリア	1953	4	73	74	—	—	14	165
スイス	1951	5	49	49	93	—	—	196
8か国合計		344	530	890	296	300	68	2428
比率 (%)		14	23	37	12	12	3	100

（出所）Michael Patrick Forgarty, *Christian Democracy in Western Europe 1820-1953*, New York: Routledge, 2018 (First published in 1957, London: Routledge), p. 295, Table 13 より作成。

究関心の薄さを招いた⁶⁾。さらに、日本の政治状況においてはキリスト教民主主義政党に対応する政党がなく、研究者が興味を持つことが少なかったこともある。

しかし、1990年代になるとヨーロッパのとくに政治研究の学界においてキリスト教民主主義に関する研究が顕著に増えてきた⁷⁾。それらの研究は、ヨーロッパ各国のキリスト教民主主義の歴史や特徴を比較するものが多いが、なかにはウォルフラム・カイザー (Wolfram Kaiser) のようにヨーロッパ統合との関連を考察するものもある。また、我が国においてもこうしたヨーロッパの研究動向を反映して、とくに政治史の分野でキリスト教民主主義に関する研究が90年代後半以降なされるようになった。ただし、内外の研究の多くは政治史研究者によるものであり、またヨーロッパ統合に関する研究は少ない。

本稿の目的は、以上みたような内外の研究動向を踏まえて、戦後のヨーロッパ統合に対するキリスト教民主主義の影響の一端を明らかにすることにある。ヨーロッパ統合を研究するには、政府間の交渉だけではなく、統合に影響を与えるトランスナショナル・ネットワークの思想と活動が重要である⁸⁾。そこで、本稿では、西欧各国におけるキリスト教民主主義政党について概観するとともに、キリスト教民主勢力のネットワークとりわけ1948年に結成されたキリスト教民主主義政党のネットワークである新国際エキップについて検討する。この団体は1948年5月のハーグ・ヨーロッパ大会に参加しヨーロッパ統合を支持する民間団体の一つとして主導的役割を果たし、ヨーロッパ運動 (European Movement) の結成にも貢献した。さらに49年4月のウェストミンスター経済会議でも重要な役割をはたして1950年代のヨーロッパ統合を準備した。

第 1 章 西欧におけるキリスト教民主主義政党

第 1 節 戦前・戦中のキリスト教民主主義

ヨーロッパにおけるキリスト教の政治運動は、19 世紀後半に自由主義政権が世俗化政策を進めたことに対する対抗運動として始まった⁹⁾。ただし当初、バチカンや各国の司教団は、下級聖職者や一般信徒に対するコントロールの低下を恐れて、大衆運動には消極的であった。しかし、1870 年にドイツで設立された中央党が 1871 年の選挙で多数の議席を獲得したことをきっかけに、1880 年代にベルギー、オーストリア、オランダなどで「宗派政党」(confessional party) が選挙で勝利をおさめて政権に参加した¹⁰⁾。

20 世紀になると「宗派政党」の呼称は「キリスト教民主主義政党」(Christian Democrat party) に代わっていく。その理由は、この頃から党が教会から一定の自律性を獲得し、さらに党内において「キリスト教民主派」が影響力を増したことがあった。キリスト教民主派は、民主化や社会問題への対応を主張する労組系の運動である。また 1891 年の教皇回勅「レールム・ノヴァルム」(Rerum Novarum: 新しい事柄) が資本主義の行き過ぎによる労働者の悲惨な状況を指摘したことも、キリスト教民主派に対する追い風となった¹¹⁾。

1919 年 1 月にシチリア出身の司祭ドン・ルイジ・ストゥルツォ (Don Luigi Sturzo) が、キリスト教的民主主義を掲げたイタリア人民党 (Partito Popolare Italiano: PPI) を設立し書記長となった¹²⁾。彼はのちに「キリスト教民主主義の父」と呼ばれことになる。イタリア人民党は、イタリア初のカトリック政党であるが、バチカンとは一定の距離を保ち、国内の敵対する社会階級の間で調停者としての役割を果たそうとした。しかし、ベニト・ムッソリーニ (Benito Mussolini) との協調路線をとったバチカンによってストゥルツォは 1923 年に辞任に追い込まれた。さらにファシストとの対立が激化すると、ストゥルツォに身の危険が迫ったとして教皇庁國務長官ピエトロ・ガスパリ (Pietro Gasparri) 枢機卿によって 1924 年 10 月彼はロンドンに亡命させられた¹³⁾。

第二次大戦前にキリスト教民主主義者の「インターナショナル」はなかった¹⁴⁾。ただし、ヨーロッパ規模で国境を越えて協力しようとしたキリスト教民主主義の運動は、戦間期に始まる。ストゥルツォは 1921 年にトランスナショナルなキリスト教民主主義の組織と運動の立ち上げを呼びかけた¹⁵⁾。この呼びかけは弟子のアルチデー・デ・ガスペリ (Alcide de Gasperi) とともにミュンヘンのバイエルン民族党とケルンとベルリンのドイツ中央党への訪問を皮切りに開始された。また、オーストリアやフランスのカトリック政党とも連携が作られていった。

1924 年にパリでストゥルツォは情報と連携のための国際事務局を設立し、キリスト教民主主義政党の国際会議を準備した¹⁶⁾。1925 年 12 月 12-13 日、パリでカトリックの政治家による最初の国際会議が開かれた。この会議の真の呼びかけ人はストゥルツォであったが、形

式的にはフランスで1924年に設立されたばかりの人民民主党 (Parti Démocrate Populaire: PDP) の招請によるものであった。このパリ会議にはフランス人民民主党、ドイツ中央党、ベルギーのキリスト教労働者連盟 (Mouvement ouvrier chrétien: MOC)、ポーランド・キリスト教民主党 (Polskie Stronnictwo Chrzescijanskiej Demokracji) の5つの政党から34人が参加した。

パリ会議の結果、1925年にパリでキリスト教民主主義政党国際事務局 (Secrétariat International des Partis Démocratiques d'Inspiration Chrétienne: SIPDIC) が設立され、キリスト教民主主義の国際的な政党間協調が始まった。SIPDICの事務局はフランス人民民主党に置かれ、1925年から32年まで8回の年次大会が開催された¹⁷⁾。

しかし、1930年代になるとヨーロッパ大陸ではファシズムの嵐が吹き荒れキリスト教政党は活動できなくなった。すでに1926年にムッソリーニによってイタリア人民党は解散させられ¹⁸⁾、1933年7月にはドイツでナチス・ヒトラーによってドイツ中央党が解散させられた。SIPDICの活動は、形骸化し1939年には活動を停止した。SIPDICには11の政党が参加したが、結局、活発な活動はできなかった。

ヨーロッパ大陸を追われたカトリック政治家は亡命先の英米において同地の支援者の援助でネットワークを形成した。1936年11月にロンドンで「人民と自由グループ」 (Peoples and Freedom Group) という名のカトリック組織が設立された¹⁹⁾。同グループは、リベラルなカトリックが中心であり、講演会を開き、1938年からは月刊で『人民と自由 (People & Freedom)』という会報を発行した。「人民と自由」を名乗る組織は、アメリカでもニューヨーク、ボストン、ロサンゼルスなどで設立されたが規模は小さかった。

1941年2月、ストゥルツォは協力者とともに「人民と自由グループ」の周辺に国際キリスト教民主同盟 (International Christian Democratic Union: ICDU) を設立した。ICDUは亡命したキリスト教民主主義の政治家や知識人の対話の場となった²⁰⁾。ICDUの名誉委員には、ストゥルツォのほかにチェコスロヴァキア亡命政府首相のヤン・シュラーメク (Jan Sramek) やポーランド亡命政府閣僚のユゼフ・ハルレル (Jozef Haller) などがいた。「人民と自由」やICDUは、ヨーロッパのカトリック抵抗運動家と英米に亡命したキリスト教政治家との交流点を提供した。亡命キリスト教政治家は、ベルギー、フランス、オランダ、ポーランド、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィアに加えてフランコの独裁を逃れたバスクやカタルーニャからも来ていた。

しかしながら、これらの組織は、戦後のヨーロッパに直接的な影響力はほとんど持たなかった。その理由は板橋拓己が指摘するように「人民と自由」やICDUに参加した政治家の多くが急進左派的で自国の党内では非主流に位置する人々だったからである²¹⁾。亡命キリスト者たちは、戦後のキリスト教民主主義政党の設立にほとんど関与できず、大戦中のネットワークが貢献したとは言えない。

第二次大戦後の西欧キリスト教民主主義政党の設立者や指導者となったのは、国外に亡命した人々ではなく、大戦中に国内にとどまりレジスタンスにかかわった政治家であった。例えば、フランスのシューマンやジョルジュ・ビドー (Georges Bidault)、ドイツのコンラート・アデナウアー (Konrad Adenauer) やヤコブ・カイザー (Jakob Kaiser)、イタリアのデ・ガスペリ、オーストリアのレオポルド・フィグル (Leopold Figl) 等である。

また、1944年のピウス12世 (Pius XII) のクリスマスメッセージが民主主義とキリスト教の関係について述べたことは、キリスト教民主主義政党が民主主義の擁護と全体主義への拒絶を明確にする契機となった²²⁾。

第2節 第二次大戦後のキリスト教民主主義政党

第二次大戦の終了間際の1944年から45年にかけてヨーロッパではキリスト教民主主義政党が再結成または設立された。ヨーロッパで戦前から存続したキリスト教政党は1912年発足のスイス保守人民党 (Schweizerische Konservative Volkspartei: SKVP) だけだった²³⁾。

戦後ヨーロッパの政治状況で共通の特徴は、強力なキリスト教民主主義政党の出現であった²⁴⁾。戦前にあった宗派政党は保守的で教会の利害を代表していたが、戦後のキリスト教民主主義政党は戦前との関係を否定し教会の影響力は小さかった。キリスト教民主主義政党には、様々な勢力や思想が入っていたが、民主主義を全面的に受け入れ、労働者階級や小農民層からの支持も得て社会改革に意欲的であった。ただし、オランダのカトリック国民党だけは宗派的側面を引き続き強調した。

第二次大戦直後の選挙において大陸ヨーロッパのキリスト教民主主義政党は予想以上の勝利を取めた。その大きな要因は、従来の保守政党の多くが戦前・戦中にファシズムやナチズムと結託したため戦後に国民の信頼を失ったことにある。他方、キリスト教民主主義者は戦時中レジスタンス活動を行っていた。戦後、大陸ヨーロッパの保守層の多くにとって選挙での投票先はキリスト教民主主義政党以外に選択肢はなかった。

キリスト教民主主義政党の中で特に強力なのはドイツのキリスト教民主同盟 (CDU) とそのバイエルンにおける姉妹政党のキリスト教社会同盟 (CSU) であるが、イタリアやベネルクスにおいても政権を担当する有力な政党であった。また、フランスでは人民共和運動 (Mouvement Républicain Populaire: MRP) が、戦後しばらくの間は有力でありシューマンはこの政党の中心人物だった。

対照的にスカンジナビアではキリスト教民主主義政党は常に弱く、イギリスでは極めて小さな政党があるのみで議会に議席を得るような政党はなかった。ここにも1970年代に入るまでイギリスやスカンジナビア諸国がヨーロッパ統合に参加しなかった要因の一つがあると考えられる。また、南欧のスペインとポルトガルではフランシスコ・フランコ (Francisco Franco) とアントニオ・デ・オリヴェイラ・サラザール (António de Oliveira Salazar) の

独裁政権が政治を宗教から分離させ、宗派政党は排除されていた。次に主要国のキリスト教民主主義政党について概観しよう。

(1) イタリア

1861年に統一された国民国家イタリアとバチカンは当初から対立していた。1882年、レオ13世(Leo XIII)は教令「ノン・エクスペディト」(non expedit:不都合,不適宜)を發布し、カトリック教徒がイタリア政治にかかわることを禁止した²⁵⁾。イタリアでは19世紀末から社会党が労働組合や農業組合を組織化し、1904年9月にはイタリア史上最大のゼネストが起こった。これに衝撃を受けたピウス10世(Pius X)は、社会主義の拡大を阻止しカトリックによる反撃の必要性を認識する。彼は、1905年に回勅「イル・フェルモ・プロポジト」(Il Fermo Proposito:通常的目標)を出して「ノン・エクスペディト」を緩和し、カトリック教徒の国政への参加を条件付きで認めた²⁶⁾。

第一次大戦やロシア革命などの政治情勢の大きな変化を受けて1919年、教皇ベネディクトゥス15世(Benedictus XV)は「ノン・エンクスペディト」を解除し、カトリック教徒の政党結成や政治・社会運動を奨励した。こうして1919年以降、イタリアを始め多くの国でキリスト教政党が結成されることになった。

1919年にストゥルツォによって結成されたイタリア人民党(PPI)は、ロシア革命による共産主義勢力の伸長やイタリア社会党の台頭に対抗するために結成された中道左派の平信徒の党であった。同党はすぐに社会党に次ぐ第2党に躍進した。しかしイタリアでは1922年10月にムッソリーニの「ローマ進軍」と呼ばれる直接行動によってファシスト党が政権を握った。イタリア人民党は、ローマ進軍後ファシスト党に協力し最初の内閣に参加したが、その後ファシズムに反対するようになった。ところが、バチカンは、ムッソリーニとの協力関係を重視しストゥルツォを批判するようになりついに絶縁した²⁷⁾。

1926年にムッソリーニによってイタリア人民党は解散させられ、党の指導者や知識人は英米などへの亡命を余儀なくされた²⁸⁾。ロンドンに亡命したストゥルツォは、1940年9月にロンドンを去り、40年10月から46年8月までアメリカに亡命した。ストゥルツォは、ファシスト支配の「暗黒の20年」(ventennio nero)の大半をニューヨークで送り、執筆活動を行った。他方、バチカンは1929年にムッソリーニとラテラノ条約(コンコルダート)を結んだ。

1944年に結党されたキリスト教民主党(Democrazia Cristiana: DC)は、人民党の流れを受け継ぎ指導者にはデ・ガスペリなどストゥルツォの弟子が多かった。結党時に指導力を発揮したのは保守強硬派のジェッタ(Gedda)やロンバルド(Lombardo)らの「カトリック行動派」であり「民主独裁」を目指した。他方、労働運動系の左派にはカトリック系労働組合員が多くいた。しかし、その後の党を主導したのは中道派のデ・ガスペリであった²⁹⁾。

1946年6月の制憲議会選挙でキリスト教民主党は勝利したが、社会党、共産党との不安定な連立政権となった。しかし、1948年4月の総選挙でキリスト教民主党は勝利し政権は安定し、53年の総選挙でも勝利した。ところが、党内対立からデ・ガスペリは53年に首相の辞任を余儀なくされ、翌54年死去した。

(2) ドイツ

戦前のドイツでは、カトリックを支持基盤とする中央党 (Zentrum) があり右派諸政党と連立を志向していた³⁰⁾。1918年から33年までの間に中央党からは4人の首相を出した。すなわち、カール・フェーレンバハ (Karl Fehrenbach, 1920-21年)、ジョセフ・ヴィルト (Joseph Wirth, 1921-22年)、ヴィルヘルム・マルクス (Wilhelm Marx, 1923-24年, 1926-28年)、およびハインリヒ・ブリューニング (Heinrich Brüning, 1930-32年) である。中央党は1933年3月23日にアドルフ・ヒットラー (Adolf Hitler) の全権委任法に賛成してナチスの独裁に手を貸したが、同年7月解散に追い込まれた。

戦後、1945年に中央党再建の試みは挫折し、キリスト教諸教派間の統一運動による合同政党を設立する道が模索された。ドイツの西側地区においてキリスト教民主同盟 (Christlich-demokratische Union: CDU) がアデナウアーを代表として1946年2月26日に組織され、その後バイエルンを除く西ドイツ全域で組織された。

他方、バイエルンでは1945年キリスト教社会同盟 (Christlich-soziale Union: CSU) が発足した。CDUとCSUは、1947年2月、国会において合同会派を形成し今日まで継続している。

(3) フランス

フランスでは戦間期に二つのキリスト教系の政党が設立された³¹⁾。一つはキリスト教民主主義者マルク・サンニエ (Marc Sangnier) が設立した非宗派的で中道左派の「青年共和国」 (Jeune République) である。サンニエは『ル・シヨン』 (Le Sillon) という左派カトリックの教育組織を主宰していたが、1910年にピウス10世の糾弾を受けシヨンを解散していた。もう一つが、キリスト教民主系議員によって1924年の総選挙後に設立された「人民民主党」である。両党は対立し、ともに小規模であり、戦前まで有力なキリスト教政党はフランスに存在しなかった。

しかし、第2次大戦末期に設立されたキリスト教民主主義の人民共和運動 (MRP) は第4共和政 (1946-58年) において多くの支持を獲得し、戦後フランスの再建とヨーロッパ統合に大きな役割を果たした。MRPは、1944年11月に戦前の2つの弱小カトリック政党である「人民民主党」と「青年共和国」両党によってリヨンで設立された。その後、MRPには戦間期からレジスタンス運動のなかで展開されたカトリック活動団運動 (アクション・カ

トリック)の各団体やフランスキリスト教労働者同盟(Confédération Française des Travailleurs Chrétiens: CFTC)が参加した。なお、MRPの結党大会でサンニエが名誉総裁に選ばれた。

ただし、MRPは、党の綱領で宗派性を原則として示さず、入党資格からも宗派性を排除し、「キリスト教民主主義」を名乗ることはなかった。したがって、MRPは、明確なイデオロギーを欠くことになったが、MRPの特徴は、レジスタンス運動の活動家を多く擁していたことにあった。党の指導者のビドーはレジスタンスの全体協議会の幹事長であり、モーリス・シューマン(Maurice Schumann)、フランソア・ド・マントン(François De Menthon)、ピエール-アンリ・テトジャン(Pierre-Henri Teitgen)などの有力メンバーもレジスタンスにおいて大きな役割を果たした³²⁾。

第4共和制期にフランスでは臨時政府時代を含めて27の政府が誕生したが、MRPは23の連立政権に参加した。そして、R. シューマン(首相在職1947.11-48.7)、ビドー(首相在職1949.10-50.6)、ピエール・フリムラン(Pierre Pflimlin, 首相在職1958.5-6)の3人が首相となった。さらにR. シューマンとビドーは第4共和政期の外相をほぼ独占して、フランスのヨーロッパ統合政策を推し進めた。第4共和政期は政権交代が頻発したが、外相だけはほぼMRPの二人によって担われ統合路線が継承されたのである。

以上のように第4共和政期はキリスト教民主主義政党がフランスの国政を左右した稀有な時代であったが、この時期にECSCやEECが設立されヨーロッパ統合が現実のものとなった。MRPが参加する政府がヨーロッパ統合の開始時に政権を担っていたことは、歴史における偶然であろうか。

なお、戦後、1946年1月まではMRPはドゴールと緊密な関係にあり、ドゴールへの「忠誠の党」(parti de fidélité)であった。しかし、その後、MRPはドゴールと対立し、47年4月ドゴールはフランス人民連合(Rassemblement du Peuple Français: RPF)を創設した。RPFは順調に勢力を拡大したわけではないが、MRPは次第にドゴール派に支持者を奪われていく。さらに、1958年からの第5共和政の下でドゴール派が勢力を拡大し、1960年代MRPは弱小政党へと転落した。

第3節 3人の統合主義者—シューマン、デ・ガスペリ、アデナウアー

1940-50年代のヨーロッパ統合にシューマン、デ・ガスペリ、アデナウアーの3人は大きな貢献をした。1950年5月に欧州石炭鉄鋼共同体を提案したシューマンは、1947-48年に首相であり1948年から52年まで外相を務めた。デ・ガスペリは1945年から53年までイタリア首相を務め、アデナウアーは1949年から63年まで西ドイツの首相兼外相であった。3人はともに熱心なカトリック教徒でありキリスト教民主主義政党に所属し、また国境地域の出身でナショナリズムの行き過ぎによって被害を被った経験を持つ点でも共通していた³³⁾。

シューマンは、1886年にルクセンブルクに生まれた³⁴⁾。シューマンの父親はロレーヌ地方の出身であったが、普仏戦争（1870-71年）の後にルクセンブルクに移住していた。シューマンはルクセンブルク人としていくつかのドイツの大学で勉学したのち弁護士となりロレーヌ地方のメッツに居住した。1919年にヴェルサイユ条約によりロレーヌ地方がフランスに復帰すると、シューマンはフランス国籍を取得し、19年にキリスト教系の地方政党所属の下院議員になり40年まで在職した。

第二次大戦中の1941年にシューマンはドイツ軍に逮捕されるが、42年に逃亡してレジスタンス運動に従事した。戦後、彼は1946年からMRPの国民議会議員となりフランスの政治家として1963年に亡くなるまで活動した。とくに1947-48年には首相を、1948-52年には外相を務めた。

デ・ガスペリは、1881年に当時オーストリア＝ハンガリー帝国領であったトレント（南チロル）で生まれた。彼は、インスブルック大学とウィーン大学で学び、1911年からオーストリア議会の議員を数年間務めた。第一次大戦後のサン・ジェルマン条約により「未回収のイタリア」（*Italia irredenta*）がイタリアに割譲されたことによってデ・ガスペリは30歳代後半でイタリア市民となった。彼はイタリア人民党の結成に参加し、下院議員となりイタリア政界入りし人民党の指導者となった³⁵⁾。

ファシズム体制下でデ・ガスペリのイタリア人民党は当初これを支持したが批判に転じた。彼はファシズムに対抗するためには社会党とも協力するべきであると主張したが、バチカンにはファシストを支持して社会主義政党との協力を反対した。イタリア人民党は1926年11月に国家防衛法によって解散させられ、デ・ガスペリは1927-29年に投獄された。出獄後の1929年に彼はバチカン図書館に匿われてファシズム期を比較的安全に過ごすことができた。1942年のキリスト教民主党的結成においてデ・ガスペリは主導的役割を演じ書記長に就任した。また、1943年のバチカンの雑誌に、彼はヨーロッパ統合を提唱する匿名の論説を発表している。1945年12月、彼は反ファシズム諸政党からなる連立内閣の首班となり、53年まで連続8期連立政権を率いた。

アデナウアーは1876年にケルンに生まれ、他の二人と違って国籍の変更を経験したことはなかった³⁶⁾。アデナウアーはラインラント人らしくフランスびいきの国際派で、ラインラントを領域の一部とするプロイセンに対して警戒心を持っていた。彼はワイマール期にケルン市長（1917-33年）として政治活動を始め、中央党員としてプロイセン貴族院とプロイセン国家諮問院の議員（1920-33年議長）であった。1920年代には2度首相候補となった。ナチスが政権をとるとアデナウアーは公職追放となりケルン市長を罷免され、1934年と44年に2度逮捕されて短い期間であるが投獄された。

戦争が終わると、アデナウアーは1945年に連合国占領下で再びケルン市長となった。さらに、彼は即座にキリスト教民主同盟を創設し、1946年以降ラインラントとイギリス占領

地区の党首を務め、後に西ドイツ全土における党首となった。アデナウアーは1949年に西ドイツの初代首相に就任すると1963年に退陣するまで15年近く同職を務めた。

これら3人の間には宗教的なつながりがあると見なされ、「黒衣をまとった共同戦線」(the Black Front)とも呼ばれた。なお、黒衣は聖職者の法衣である。実際、ヨーロッパ統合という共通の目標を追求する中で彼らは親交を結び、共通語であるドイツ語で会話が交わされた³⁷⁾。

ヨーロッパ統合の第一歩となった欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) の計画を1950年5月に発表したのはフランス外相シューマンであった。シューマンの提案によってECSC設立のための国際交渉が行われ、当時の西ドイツ首相アデナウアーやイタリア首相デ・ガスペリらによってECSCは1952年に発足した。デ・ガスペリは1954年に亡くなり、シューマンはほぼ同じころフランス政界を引退したが、1958年から60年まで欧州議会の議長を務めるなど晩年までヨーロッパ統合に尽くし1963年に生涯を閉じた。

アデナウアーは、1957年3月、81歳のときにローマ条約に調印しEECとユーラトム(欧州原子力共同体)の設立にも直接関与した。さらに、1958年に登場したドゴール仏大統領との間に信頼関係を築き60年代初めに独仏和解を実現した。しかし、国家主義者ドゴールとの妥協によってアデナウアーの理想とするヨーロッパ連邦の実現からは遠ざかることになった。彼は1963年に政界を引退し、67年に逝去した。

第2章 新国際エキップの設立

第1節 新国際エキップ設立の準備会合

戦前ストゥルツォによって設立されたキリスト教民主主義政党国際事務局 (SIPDIC) は第二次大戦後に再建されなかった。ストゥルツォは1945年に「人民と自由グループ」をキリスト教民主主義国際情報局 (International Information Service of Christian Democracy) に改組し、これをスイスから指導した³⁸⁾。

第二次大戦直後の総選挙で新たに登場・再建されたキリスト教民主主義政党は、各国で大きな勝利をおさめ政権与党となった。この支持拡大を背景にして、キリスト教民主主義政党間の連携を強化しようとする機運が高まった。そのイニシャチヴを取ったのがフランスのMRPとスイスの保守人民党である。

1945年12月にパリでMRPの第2回全国大会が開催された。この会議にはビドーによってベルギー、イタリア、ルクセンブルク、オランダからの代表団が招待された。これを契機に、MRP事務局長で情報大臣のロベール・ビシェ (Robert Bichet) は、デ・ガスペリ、ストゥルツォ、ベルギーのポール・ヴァンゼーラント (Paul van Zeeland) などの有力政治家を訪問し、キリスト教民主主義の国際組織の設立について彼らと協議した。とくにベルギー

キリスト教社会党党首のジュール・スヨー (Jules Soyeur) は、ビシェと連絡を取り、親ヨーロッパのフランス・ベルギー連携を形成した³⁹⁾。

しかし、最初に国際会議を開催したのは戦前以来のキリスト教民主主義の唯一の政党であるスイス保守人民党であった。同党によって1946年2-3月にスイスのモントルー (Montreux) でヨーロッパのキリスト教民主主義政党による最初の会議が開かれた。さらに同党の指導者ジョセフ・エッシャー (Josef Escher) のイニシャチヴで翌1947年2月27日から3月2日にルツェルン (Lucerne) で2回目の会議が開かれた⁴⁰⁾。ルツェルン会議でキリスト教民主主義政党間の国家を超えた協力について議論され、最終的に新国際エキップ (Nouvelles Équipes Internationales: NEI) の設立が決まった。以下、ルツェルン会議での議論について概観しよう⁴¹⁾。

ルツェルン会議では将来の国際組織の在り方について意見の対立があった。主催したスイスを始めオーストリアおよびイタリアは、キリスト教民主主義政党の緊密な国際組織いわば政党の設立を主張した。これに対してベルギー、オランダそして特にフランスは、政党のような組織ではなく個人同士が協力する柔軟な協力形態を望んだ。

ベルギーのキリスト教社会党 ((Parti Social Chrétien: PSC) - キリスト教人民党 (Christelijke Volkspartij: CVP)⁴²⁾ の代表は、PSC-CVPは旧カトリック党とは大きく異なり、非宗派的政党であり信仰を持たない人にも開かれていると述べた。そして、国際的關係においては、政党間の組織的關係ではなく個人間の情報交換、会談、友情の形態を求めた。さらに、キリスト教民主主義インターナショナルのような組織はイギリスでは理解されない恐れがあると述べた。そこで代替案としてベルギーは新国際エキップという名の組織を提案した。これはキリスト教民主主義の代表ではないが同様の志を持つ個人や「人道主義者」、「人民民主主義者」の参加も認めるものである。

フランスMRPの指導者は、会議にあくまでも代表ではなく個人の資格で参加していることを強調したうえでMRPにはユダヤ教徒、プロテスタントさらにムスリムの党员がおり様々な傾向を融合していると述べ、新たな国際組織が「キリスト教民主主義」に分類されることに反対した。また、MRPは国際組織が教権主義的で右派の「黒いインターナショナル」とみなされる恐れを示し、ヨーロッパを東西に分断することを危惧した。MRPは、国際キリスト教民主主義のインターナショナルは時期尚早であるとし、これに代わるものとしてキリスト教を連想させないベルギーが提案した新国際エキップを挙げた。

こうしてMRPとベルギーPSC-CVPが宗教色を嫌ったため、組織の名称に宗教(キリスト教)を連想させる語が入らない新国際エキップ (NEI) の設立が決まった⁴³⁾。NEIは「キリスト教」の語を避けより一般的な「人民民主主義」(démocrate populaire)をその思想として明示した⁴⁴⁾。また、会議はPSC-CVPのヴァンゼーラントにアングロサクソン諸国で会員を獲得する任務を託した⁴⁵⁾。

ルツェルン会議では、国際組織以外の議論として、「第3の道」に関するものがあった。ベルギー PSC-CVP は、経済思想の転換の必要性を示唆し、資本主義ではなくまたエタティズム（国家介入主義）でもない第3の道を求めていると述べ、労働者階級を企業や産業の活動に参加させることや生活費に見合った賃金を要求した。オランダ代表も「キリスト教精神は資本主義とマルクス主義に同時に反対する」として第3の道を労働党とともに探求すると述べた。そして、もしヨーロッパが第3の道を見つけれなければヨーロッパは死ぬことになるだろうと警告した⁴⁶⁾。

また、外交面でもフランスとベルギーの代表は、今日世界が2つのブロックに分裂する危機に直面していると指摘し、ヨーロッパが米ソの間を仲介してこれを阻止する努力をすべきであると述べた。

NIE は、各国からのエキップ (équipes: フランス語でチーム) から構成されるが、実際には各国の政党単位で参加する場合が多かった⁴⁷⁾。創設時に政治家が個人の資格で参加したのは、フランスの MRP とベルギーの PSC-CVP であり、ほかにイギリスとザールラントから参加があった。政党単位で参加したのは、スイス、イタリア、オーストリア、オランダ、ルクセンブルクである。また、ブルガリア、ルーマニア、リトアニア、ハンガリー、ポーランド、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、バスクからの亡命者もいた。なお、ドイツのキリスト教民主同盟とキリスト教社会同盟は、おくれて 1948 年に加盟した。

会議終了日に新国際エキップの原則と目的を説明する「結成宣言」が発表された⁴⁸⁾。宣言は、まずヨーロッパ文明が人間個人の価値を重視していることを強調し、ヨーロッパ文明の防衛とその民主的影響力の拡大にとってすべての国の社会的、政治的、経済的活動を調和することが重要であると訴えた。そして「新国際エキップは、人民民主主義思想に鼓舞された政治的・社会的諸個人の間での定期的な接触を確立するために設立された」と宣言した。

ルツェルン会議は、ベルギー PSC-CVP に新しい会議を組織することを託した。キリスト教民主主義者による次の会議が、ヴァンゼーラントを名誉議長として 1947 年 5-6 月にリエージュ近郊で開催されることになった。

第2節 新国際エキップ第1回会議

新国際エキップの設立会議（第1回会議）はベルギーのリエージュ (Liège) 近郊ショフォンテーヌ (Chaufontaine) で 1947 年 5 月 31 から 6 月 2 日まで開催された。この会議は、NEI の理論と組織を確定し、NEI は本格的に活動を開始することになった。まず、出席者⁴⁹⁾をもとにして執行委員会 (Executive Committee) が設立された。執行委員会の委員長にはビシエ、副委員長にはルクセンブルクのエンジャン (Hengen)、オランダのサッセン (Sassen)、ベルギーのデジレ・ラマル (Désiré Lamalle) が就任した。また、事務局長にはスヨーが就き、事務局はブリュッセルにおかれた。このように設立時の NEI ではフランス

とベルギーの影響力が強かった。なお、事務局はのちにパリに移転し、1964年からはローマに置かれた⁵⁰⁾。

会議にはベルギーによってバスク、ポーランド、チェコの亡命キリスト教政党の代表も招待された。会議には13か国から政党、労働組合、各種団体が参加し「労働者の社会的状況と労使関係」を全体テーマとした。

全体テーマの議論をリードしたのは、MRPのジョゼフ・ルブレ神父 (Father Joseph Le-bret) であった。ルブレは、ドミニカ出身で「経済と人文主義」(Économie et Humanisme) という研究グループの責任者であり、MRPの経済・社会政策に大きな影響力を持っていた。また、彼はMRPの親ヨーロッパグループの中心人物でもあった⁵¹⁾。

ルブレは、資本主義が労働者のプロレタリアート化をもたらしたこと、キリスト教徒がこれに加担してきたことを批判する⁵²⁾。その上で、キリスト教徒が進歩の先兵として世界に登場し、科学、技術的進歩、労働合理化、労働時間削減、すべての階級への教育と文化の普及、適任者に地位を与えることを訴えた。このようにルブレは、資本主義の行き過ぎを批判し、労働者の状況を改善することを主張した。

会議では、「原則の宣言」⁵³⁾ においてすべての国における社会的、政治的、経済的な到達点を調和させることが重要であり、NEIは民主的考えを持つ人々の間の定期的連絡をこの目的のために確立するために設立されたと宣言した。そして、こうした連絡は、効果的な民主的社會政策の積極的要素を結合することを可能にするとされた。

会議の「決議」⁵⁴⁾ は、「民主主義はもはや政治分野に限定すべきではなく、社会的、経済的分野にも広めるべきである。資本の利益は、国民経済を支配するために許されてはならない」と社会的側面を重視した。ただし、「決議」は、国家が直接経済活動に介入することには慎重であり、地方自治体や自由な職能団体がかわるべきであるとされた。

また、「決議」は、社会経済組織が雇用者団体と労働組合との間の対等な関係に基づく協力関係に基礎を置くべきであるとされた。このように、NEIは共産主義が主張する階級対立でなく労使協調による経済の運営を求めた。

リエージュ会議は、労働者階級の社会的状況をテーマとして、反共産主義の立場を明確にし、共産主義と資本主義の間を行く経済的、社会的「中道」の方針を採択した。また、ヨーロッパ統合は会議の議題とはならなかった。しかし、1947年末から次期の会議の準備が進む中でNEIはヨーロッパ統合の考えに舵を切っていく⁵⁵⁾。

第3章 新国際エキップのヨーロッパ統合路線

第1節 新国際エキップ第2回会議：ドイツ問題の解決

NEIの第2回会議は、1948年1月30日から2月1日にルクセンブルクで行われ、「ドイ

ツ問題」をテーマとした。これまで NEI とドイツのキリスト教民主・社会同盟との公式の関係はなかった。オーストリア人民党党首のフェーリクス・フルデス (Felix Hurdes) は、強い反対を押し切ってルクセンブルク会議にドイツ代表が対等の権利を持って参加することを可能にした。これによって、CDU のアデナウアーとヤーコプ・カイザー (Jakob Kaiser), CSU 党首のヨーゼフ・ミュラー (Josef Müller) らが会議に参加した⁵⁶⁾。

会議では、ベルギーのラマルがドイツ問題に関して次のような趣旨の演説を行った⁵⁷⁾。ドイツが平和的、調和的なやり方で復興できなければ、ドイツは東洋の野蛮に陥る。ドイツが自国内の資源の上に自身の努力で再び活動できるのは明らかである。ドイツ問題を、拒絶やその場しのぎの策、不信によって解決することは危険である。ドイツが再び政治的集権化や戦闘神話の方向に向かうことはヨーロッパの利益にならない。

ドイツ問題の唯一の効果的な解決方法は、ヨーロッパとドイツを一緒に再建することである。その際、新しいドイツの地理的中心は、民主主義の伝統のある旧自由都市、ローマの伝統が残っているラインラントであり、これらの地域は西欧と同じである。また、南部地域はキリスト教の影響が強い地域であり対象となる。反対にしばしば「血と鉄」で表現される東欧の影響はドイツから追い払うべきである。

このようにラマルは古代ローマ帝国の版図に属する、一度は自由と文明を経験した地域をヨーロッパとともに再建されるドイツとして挙げた。ここには、中央集権的なプロイセンや共産主義の影響を受け始めた東部ドイツは含まれていない。

「善きドイツ」と「悪しきドイツ」を区別する「二つのドイツ」論は、「ドイツ問題」で演説した多くの論者で共通していた⁵⁸⁾。こうした二項対立は NEI においてカトリック思想が強い影響力を持っていることの反映である。彼らは、エルベ以東は、ルター的でプロイセン的な「悪しきドイツ」であり、西部はカトリック的な「善きドイツ」であるという単純化した強引な理解にもとづいて発言したのである⁵⁹⁾。

次にラマルは経済の重要性を指摘する。1世紀以上前プロイセンはドイツ関税同盟 (Zollverein) を設立し、ドイツ帝国の建国に導いた。ドイツの経済的、社会的統一は、ドイツの政治的統一に先立ち、それを可能にした。同様に、西欧諸国の統合のためには段階的に経済統合を行いこれに成功しなければならない。ラマルは、西欧諸国が連邦化に向かっているとし、ドイツが段階的に新しいヨーロッパに統合される以外にドイツ問題の本質的解決はないと主張した。

イギリス占領地区 CDU 党首のアデナウアーを代表とするドイツ代表団は、戦後に国際会議に参加したドイツで最初の代表団であった。アデナウアーの演説は、ナチス時代にキリスト教徒が抵抗したことを強調し、国家社会主義は物質主義 (Materialismus) の完全勝利であったとして、西欧文明のキリスト教徒が物質主義との戦いに加わることを呼びかけた⁶⁰⁾。そして、戦後におけるソ連とその衛星国、およびフランスとイタリアの共産主義に対する敵

意を明確に示した。

アデナウアーはドイツにおける共産主義や物質主義との戦いにおいて CDU-CSU が唯一の信頼できる防波堤であると述べる。社会民主党 (SPD) は、確かに反共産主義であるが、同党は唯物論哲学に根差す考えを持っており、原理的、長期的に SPD は物質主義 (唯物論) に対する防波堤とはならないと警告した。

また、キリスト教政治家は国際問題に関して緊密に協力する義務がある。なぜなら彼らは個人の自由と社会正義という同じ理念と目標を持っているからであると呼びかけた。

次にアデナウアーは、すでに関税同盟を始めたベネルクス諸国や周辺諸国と強力で包括的な貿易関係を形成することを希望した。とくにアデナウアーが強調したのがフランスとの関係であり、フランスの安全保障要求を満たしたうえでのヨーロッパ統合の永続的な基礎として独仏友好への期待を示した。

最後に、アデナウアーはドイツ問題の解決がヨーロッパ再建問題と密接に結びついており、二つの問題は一体なのだと言う。そして、「唯一、キリスト教の知的、道徳的な力が一致して働いてヨーロッパと世界の再建をもたらすこと」を確信し、「私は、ヨーロッパが第一でドイツが第二であると考える」と述べた⁶¹⁾。

ルクセンブルク会議の決議はドイツ問題をヨーロッパ再建問題の枠組みで解決する内容だった。決議は、冒頭で「ドイツ問題の解決は、ヨーロッパの全面的復興にかかっており、逆もまた同様である」と述べる⁶²⁾。1947年11-12月のロンドン外相会議の失敗は、西欧諸国に西側のみで協力し再建することを強いた。大国がヨーロッパ復興で重要な役割を演ずる一方で、民主的ヨーロッパ諸国は直接関係する事柄の決定に関与しなければならない。「ドイツ経済の問題は、ヨーロッパ協力の要請に沿って研究され解決されるべきである。採用される解決策はヨーロッパの経済再建の枠内で補償を与えなければならない。ドイツ経済は、ヨーロッパ経済計画のなかに統合されることによって、ヨーロッパ経済の均衡に貢献するはずである」。

また、決議はルールの管理とドイツの非軍事化についても言及した。ルールにおける生産には適切なコントロールがなされるべきであり、したがって、ドイツが再び近隣諸国にとって軍事的脅威となることはあり得ないと述べた。そのうえで、ドイツがヨーロッパの再建に寄与できるように貿易に課せられている制限を早期に解除するよう訴えた。

以上のように、ルクセンブルク会議は、1948年に入り鮮明になってきた高まる米ソ対立を背景にして、反共産主義を強調し、ドイツに対する警戒よりもドイツ経済をヨーロッパ経済に統合することによるヨーロッパの再建と統合の姿勢を明確にした。ここには、すでに1950年のシューマン・プランにつながる独仏協調やルールの管理を基軸にしたヨーロッパ統合路線を見て取ることができる。

こうして NEI は、キリスト教民主主義に基づくヨーロッパ統合を明確に目的として掲げ

たのである。

第2節 ジュネーヴ・サークル

NEIはキリスト教民主主義者の公式の国際組織であるが、宗教色を排除するかをはじめとして内部に多くの対立があり、合意を形成することは容易ではなかった。そこで表向きの顔であるNEIの機能不全を補ったのが、ほぼ同時期に生まれたジュネーヴ・サークル(Geneva Circle)あるいはジュネーヴ会合(Geneva session)と呼ばれたキリスト教民主主義者の非公式の定期会合であった⁶³⁾。このサークルは1947年に始まり、ヨーロッパ統合や独仏関係に関する自由な意見交換の場となった。

ただし、松本佐保によるとジュネーヴ・サークルは戦前にまで遡ると考えられる⁶⁴⁾。第二次大戦中、中立国スイスのジュネーヴにはドイツ、フランス、ベルギー、オランダなどナチス支配下にあった国から亡命者が流れ込んでいた。キリスト教理念に基づいてレジスタンス運動を行っていた亡命者はジュネーヴを活動の拠点にした。

ジュネーヴは亡命レジスタンス活動家の相互協力の地にとどまらず、国際連盟、ILO、国際宣教協議会(International Missionary Council: ICM)など多くの国際的組織の本部が置かれていた。亡命キリスト教民主主義者は、これら国際機関とも連絡を取って活動しており、広義のジュネーヴ・サークルが形成されていた。

戦後のジュネーヴ・サークルに参加したのは、フランスのMRP、ドイツのCDU-CSU、オーストリア人民党、ベルギーのPSC-CVP、イタリアのキリスト教民主党、オランダのカトリック人民党、スイス保守人民党の西欧7党である⁶⁵⁾。各党は2名~4名の代表を送り、2日程度会合した。ジュネーヴ・サークルはとくに独仏協調に大きな役割を果たした。

第1回のジュネーヴ・サークルは1947年11月16~17日に開催されたが、この時はドイツ代表の大半は外国旅行許可の問題で参加できなかった。しかし、第2回の1948年3月の会合からアデナウアーをはじめとするドイツ代表は積極的に参加した。

アデナウアーは第二次大戦が終わると様々なヨーロッパの非公式ネットワークに参加し、とくにジュネーヴ・サークルでは政治的に問題の多い議論に関しても率直な意見交換をした。西ドイツ独立前の1948年12月の会合で彼は、ソ連の脅威を強調することによってヨーロッパ防衛のためのドイツの再軍備の有用性を主張し、総選挙で社会民主党が勝利すれば将来のヨーロッパ組織でキリスト教民主勢力は主導権を握れなくなると警告した⁶⁶⁾。

ジュネーヴ・サークルにおけるアデナウアーの積極的な発言は、MRPのビドーに好感をもって受け入れられた。ビドーはドイツに対して好意的態度を示し、独仏協調を進めようとした。当時MRP内部ではビドーとシューマンがヨーロッパ政策を巡って対立していたが、両者の仲を仲介し結びつけたのはジュネーヴ・サークルでのアデナウアーであった。フランスの有力与党がアデナウアーの尽力で一本化されたことでシューマン・プランに始まる統合

は実現した⁶⁷⁾。また、シューマン・プランは発表前にジュネーヴ・サークル内で徹底的に議論されていた⁶⁸⁾。

むすび

1945年以降のヨーロッパ統合においてキリスト教民主主義は重要な役割を演じてきた。ドイツにおいてはナチズムの、イタリアではファシズムの、フランスではペタニズムの去った政治的空白を埋めながら、キリスト教民主主義は自国の経済と政治のシステムを再建するのみならず、人権と自由民主主義の価値を全体主義の脅威に対してヨーロッパレベルで擁護した⁶⁹⁾。

さらに、彼らはヨーロッパ統合を目指してトランスナショナルなキリスト教民主主義のネットワークを形成した。こうして作られた NEI が独仏和解を開始し進める場を提供し、ヨーロッパ統合を背後から支えたことは、初期のヨーロッパ統合の推進力であった。

ヨーロッパのキリスト教民主主義政党が、ヨーロッパ統合を推進する理由はいくつかあった。とくに重要なものは経済的、社会的、文化的、宗教的理由である。ただし、最も重要な動機は政治的なものであり、とくに反共産主義が最大の動機であった。しかし、それと同時にキリスト教民主主義は、カトリック社会教説を受け継ぎ自由放任型資本主義の行き過ぎに対しても批判的であった。資本主義でも共産主義でもない「第三の道」がキリスト教民主主義の経済思想であり、社会改革をヨーロッパ統合において実現しようとした点に戦後のキリスト教民主主義の独自性がある。

1965年に NEI は欧州キリスト教民主主義同盟 (European Union of Christian Democrats: EUCD) に改組された。この EUCD をもとに 1976年にヨーロッパ人民党 (European People's Party: EPP) が設立された。これは3年後の1979年に EC の欧州議会で初の直接選挙が行われることに向けた対応であった。今日 EU の欧州議会においてヨーロッパ人民党グループは最大の政治勢力を保持している。また、欧州理事会常任議長 (President) はベルギーのキリスト教民主系政党出身で元首相のシャルル・ミッシェル (Charles Michel) である。戦後直後に誕生したキリスト教民主主義政党の連合体である NEI の影響は、今日の EU においても続いている。

注

- 1) R. E. M. Irving, *The Christian Democratic Parties of Western Europe*, London: George Allen and Unwin, 1979, p. 234; 水島治郎「西欧キリスト教民主主義」, 日本比較政治学会編『現代の宗教と政党』早稲田大学出版部, 2002年, 46-47頁; 同「キリスト教民主主義とは何か—西欧キリスト教民主主義概論」, 田口晃, 土倉莞爾編著『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』

- 木鐸社, 2008年, 31頁。
- 2) Derek Heater, *The Idea of European Unity*, New York: St. Martin's Press, 1992, p. 153 (田中俊郎監訳『統一ヨーロッパへの道』岩波書店, 1994年, 229頁)。
 - 3) Michael Patrick Forgarty, *Christian Democracy in Western Europe 1820-1953*, New York: Routledge, 2018 (First published in 1957, London: Routledge), p. 295, Table 13. なお, ECSC6か国は, 西ドイツ, オランダ, ベルギー, ルクセンブルク, フランス, イタリアである。
 - 4) Heater, *op. cit.*, p. 152 (邦訳, 前掲書, 228頁)。
 - 5) わが国における研究としては, 西川知一『近代政治史とカトリシズム』有斐閣, 1977年がある。ただし, 同書が対象とするのは第一次大戦までである。
 - 6) 土倉莞爾『西ヨーロッパ・キリスト教民主主義の研究』関西大学出版部, 2021年, 128頁; 水島治郎, 前掲論文, 2002年, 33頁。
 - 7) 本稿, 参考文献を参照。
 - 8) 自由主義者のトランスナショナル・ネットワークを検討したものとして, 小島健「欧州経済統合におけるトランスナショナル・ネットワーク—1950年代—」, 日本EU学会編『日本EU学会年報』第41号, 2021年がある。
 - 9) 水島治郎, 前掲論文, 2002年, 34-36頁。
 - 10) 西川知一, 前掲書, 59-61頁。
 - 11) 水島治郎, 前掲論文, 2002年, 38頁; 小島健『欧州建設とベルギー』日本経済評論社, 2007年, 339頁。
 - 12) Michael Burgess, "Political Catholicism, European unity and the rise of Christian Democracy," in: M. L. Smith and Peter M. R. Stirk, *Making the New Europe: European Unity and the Second World War*, London and New York: Pinter, 1990, p. 145; John Pollard, "Italy", in: Tom Buchanan and Martin Conway, *Political Catholicism in Europe, 1918-1965*, Oxford: Clarendon Press, 2002 (First edition, Oxford University Press, 1996), p. 77.
 - 13) 松本佐保『バチカンと国際政治—宗教と国際機構の交錯』千倉書房, 2019年, 62頁; 同『バチカン近現代史』中公新書, 2013年, 90頁。
 - 14) Irving, *op. cit.*, pp. 244-245.
 - 15) Heribert Gischi, "The 'Nouvelles Équipes Internationales' (NEI) of the Christian Democrats: Introduction", in *DHEI*, Vol. 4, p. 477.
 - 16) Irving, *op. cit.*, p. 244; 板橋拓己『黒いヨーロッパ』吉田書店, 2016年, 38頁。
 - 17) 板橋拓己, 同上書, 30頁。
 - 18) Pollard, *op. cit.*, pp. 81-82.
 - 19) Gischi, *op. cit.*, p. 477; 板橋拓己, 前掲書, 42頁。
 - 20) Étienne Deschamps, "Démocratie Chrétienne", in: Pierre Gerbet, Gérard Bossuat, and Thierry Grosbois (dirs.), *Dictionnaire historique de l'Europe unie*, Bruxelles: André Versaille, 2009, p. 382.
 - 21) 板橋拓己, 前掲書, 43頁。
 - 22) "Pius XXII: War on War through a League of Nations, 24 Dec. 1944", in: *DHEI*, Vol. 2, Doc. 267, pp. 748-749; Deschamps, *op. cit.*, p. 382.

- 23) Werner Kulla, "Transnational Party Associations", in Walter Lipgens (ed.), *Sources for the History of European Integration (1945-1955)*, Leyden: Sijthoff, 1980, p. 152. 同党は、1957 年に保守キリスト教社会人民党 (Konservativ-Christlichsoziale Volkspartei/ Parti conservateur-chrétien social) に名称変更し、さらに 1970 年にキリスト教民主人民党 (Christdemokratische Volkspartei der Schweiz, CVP/ Parti démocrate-chrétien, PDC) となって今日に至っている。黒澤隆文編訳『中立国スイスとナチズム—第二次大戦と歴史認識』京都大学学術出版会、2010 年、712-713 頁 (索引)、参照。
- 24) Walter Laqueur, *Europe in Our Time: A History 1945-1992*, New York: Penguin, 1992, pp. 126-127 (加藤秀治郎ほか訳『ヨーロッパ現代史—西欧・東欧・ロシア』第 1 巻、芦書房、1998 年、187-188 頁)。
- 25) Burgess, *op. cit.*, p. 144 ; 西川知一, 前掲書, 73 頁 ; 松本佐保, 前掲書, 2013 年, 62 頁。
- 26) 松本佐保, 前掲書, 2019 年, 59 頁 ; 同, 同上書, 2013 年, 72 頁。
- 27) Jan-Werner Müller, *Contesting Democracy: Political Ideas in Twentieth-Century Europe*, New Haven and London: Yale University Press, 2011, p. 134 (板橋拓己, 田口晃監訳『試される民主主義—20 世紀ヨーロッパの政治思想』(下), 岩波書店, 2019 年, 17-18 頁) ; Laqueur, *op. cit.*, p. 127 (邦訳, 前掲書, 189 頁)。
- 28) Müller, *op. cit.*, p. 18 (邦訳, 前掲書, 134 頁)。
- 29) Laqueur, *op. cit.*, p. 127 (邦訳, 前掲書, 189 頁)。
- 30) ドイツのキリスト教民主主義については、野田昌吾「ドイツ・キリスト教民主同盟 (CDU)」田口晃, 土倉莞爾編著『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』木鐸社, 2008 年, 参照。
- 31) Laqueur, *op. cit.*, p. 128 (邦訳, 前掲書, 190 頁) ; 中山洋平『戦後フランス政治の実験 第四共和制と「組織政党」1944-1952 年』東京大学出版会, 2002 年, 34 頁 ; 土倉莞爾, 前掲書, 2021 年, 163 頁。
- 32) Laqueur, *op. cit.*, p. 128 (邦訳, 前掲書, 190 頁) ; 中山洋平, 同上書, 146-156 頁。
- 33) Irving, *op. cit.*, p. 234-235.
- 34) シューマンについては次を参照。Heater, *op. cit.*, p. 159 (邦訳, 前掲書, 238-239 頁)。
- 35) デ・ガスペリについては次を参照。Heater, *op. cit.*, pp. 153-154 (邦訳, 前掲書, 231 頁) ; 松本佐保, 前掲書, 2013 年, 90-91 頁。
- 36) アデナウアーについては次を参照。Irving, *op. cit.*, p. 235 ; Heater, *op. cit.*, p. 153 (邦訳, 前掲書, 230 頁)。
- 37) Heater, *op. cit.*, pp. 152-153 (邦訳, 前掲書, 229-230 頁)。
- 38) Irving, *op. cit.*, p. 244; Deschamps, *op. cit.*, p. 382.
- 39) Dechamps, *op. cit.*, p. 383; Gisch, *op. cit.*, p. 478.
- 40) Walter Lipgens, *A History of European Integration, Volume 1 1945-1947*, Oxford: Clarendon Press, 1982, p. 600 (Translated from the German by P. S. Falla and A. J. Ryder). 原著は *Die Angaenge der europaeischen Einigungspolitik, 1945-1950*, Erster Teil: 1945-1947, Stuttgart: Ernst Klett, 1977; Gisch, *op. cit.*, p. 477-478; Dechamp, *op. cit.*, p. 384.
- 41) ルツェルン会議での議論は次を参照。“Aussprache, Convenium christlicher Politiker Europas, Luzern, 27. 2-2. 3. 1947”, in: *TPEC*, Dok. 4; “Christian-Democrats and Industrial Democracy, in: *People & Freedom* 94, Juli 1947, 1-2 und 95, August 1947”, in: *TPEC*, Dok. 10.

- 42) キリスト教社会党（フランス語圏）は、オランダ語圏ではキリスト教人民党（Christelijke Volkspartij: CVP）を名乗っている。ただし、PSCとCVPは1968年に分裂するまでは同一の政党である。小島健，前掲書，329頁，参照。
- 43) Irving, *op. cit.*, p. 244; Dechamp, *op. cit.*, p. 384; 板橋拓己，前掲書，50-51頁。
- 44) “Christian-Democrats and Industrial Democracy, in: *People & Freedom*, 94, Juli 1947, 1-2 und 95, August 1947”, in: *TPEC*, Dok. 10, p. 102.
- 45) ヴァンゼーラントは，戦前ベルギー首相をつとめ戦後も上院議員，外相を務めた。彼は第一次大戦後にアメリカのプリンストン大学で修士号をとりベルギー国立銀行の副総裁を務め，戦時中はイギリスで亡命生活を送ったため英米に知己が多い。小島健，前掲書，第3章「世界大不況におけるヴァンゼーラントの政策提言」，参照。
- 46) “Aussprache, Convenium christlicher Politiker Europas, Luzern, 27. 2-2. 3. 1947”, in: *TPEC*, Dok. 4, p. 91 (Sassen).
- 47) 板橋拓己，前掲書，46頁。
- 48) “Nouvelles Équipes Internationales: Inaugural Appeal, 2 March 1947”, in: *DHEI*, Vol. 4, pp. 484-485, Doc. 116; “EntschlieÙung, Convenium christlicher Politiker Europas, Luzern, 3. 3. 1947”, in: *TPEC*, Dok. 6, pp. 95-96.
- 49) 会議の出席者は次の通り。ルクセンブルク：Reuter, Hentgen, Biever, Frieden, Schiltges, オランダ：Sassen, de Gou, Rutten, バスク：Aguirre, de Landaburu, フランス：Madame Peyroles（国民議会副議長）, Bichet, d’Haucourt, Labasse, スイス：Steinauer, Ganter, Musy, チェコスロヴァキア：Duchácek, Bauer, ベルギー：Cassian and Albert Lohest, Lamalle, Verlaine, le Hardy, Soyeur. Gisch, *op. cit.*, p. 479, note 11.
- 50) Kulla, *op. cit.*, p. 152; Irving, *op. cit.*, p. 245.
- 51) Gisch, *op. cit.*, p. 478.
- 52) ルブレの発言は次にある。“Fr. Joseph Lebret, ‘Christian vision’, International Conference at Liège (Chaufontaine) 31 May-2 June 1947, in: *DHEI*, Vol. 4, Doc. 117, pp. 485-487; “Joseph Lebret, Botschaft, NEI-Kongress, Lüttich, Mai 1947”, in: *TPEC*, Dok. 8, pp. 97-99.
- 53) “‘Declaration of principles’, International Conference at Liège (Chaufontaine) 31 May-2 June 1947”, in: *DHEI*, Vol. 4, Doc. 117, p. 487.
- 54) “‘Conclusions’, International Conference at Liège (Chaufontaine) 31 May-2 June 1947”, in: *DHEI*, Vol. 4, Doc. 117, p. 487.
- 55) Lipgens, *op. cit.*, 1982, p. 600.
- 56) Gisch, *op. cit.*, p. 488; 板橋拓己，前掲書，63頁。
- 57) “D. Lamalle, ‘Towards European Co-operation’”, in: *DHEI*, Vol. 4, Doc. 118, pp. 488-490; “Désiré Lamalle, Der wirtschaftliche Aspekt des deutschen Problems, NEI-Kongress, Luxemburg, 30.1.-1.2.1948”, in: *TPEC*, Dok. 16, pp. 112-116.
- 58) 代表的な演説としては次がある。P. J. S. Serrares, “Le problème allemande, son aspect politique, NEI, Le problème allemande, Session de Luxembourg, 30. 1. -1. 2. 1948,” in: *TPEC*, Dok. 14, pp. 107-109.
- 59) 板橋拓己，前掲書，64頁，参照。
- 60) アデナウアーの演説は次にある。“K. Adenauer, address to the congress”, in: *DHEI*, Vol. 4,

- Doc. 118, pp.490-492; “Konrad Adenauer, Ansprache, NEI-Kongress, Luxemburg, 30.1.-1.2.1948, rekonstruiert von Hans August Lükers nach Erinnerungen und zeitgenössischen Quellen, Mitteilung Lükers an das ACDP, Oktober 1981”, in: *TPEC*, Dok. 18, pp.118-120.
- 61) Ibid, in: *DHEI*, Vol. 4, p. 492.
- 62) 決議は次にある。“Resolution”, in: *DHEI*, Vol. 4, Doc. 118, pp.492-493; “Entschließung, NEI-Kongress, Luxeburg, 30.1-1.2.1948”, in: *TPEC*, Dok. 19, pp.121-122.
- 63) ジュネーブ・サークルについては以下を参照。Michael Gerler, “The Geneva Circle of West European Christian Democrats”, in: Michael Gehler and Wolfram Kaiser (eds.), *Christian Democracy in Europe since 1945*, London: Routledge, 2004; Gisch, *op. cit.*, p.507; 土倉莞爾, 前掲書, 23 頁; 板橋拓己, 前掲書, 53-54 頁。
- 64) 松本佐保, 前掲書, 2019 年, 226-227 頁。
- 65) 板橋拓己, 前掲書, 55 頁。
- 66) 板橋拓己, 同上書, 58-59 頁。
- 67) Wolfram Kaiser, “Informal Politics and the Creation of the European Community: Christian Democratic Networks in the Economic Integration of Europe”, in: Wolfram Kaiser, Brigitte Leucht and Michael Gehler (eds.), *Transnational Networks in Regional Integration: Governing Europe 1945-83*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, p.93.
- 68) Wolfram Kaiser, “Transnational Christian Democracy: From the Nouvelles Equipes Internationales to European People’s Party”, in: Michael Gehler and Wolfram Kaiser (eds.), *op. cit.*, 2004, p.231.
- 69) Irving, *op. cit.*, p.243.

参 考 文 献

【公刊史料集】

- Gehler, Michael and Wolfram Kaiser (eds.), *Transnationale Parteienkooperation der europäischen Christdemokraten. Dokumente 1945-1965/ Coopération transnationale des partis démocrates-chrétiens en Europe. Documents 1945-1965*, München: K. G. Saur, 2004 [TPEC と略記]
- Lipgens, Walter (ed.), *Documents on the History of European Integration*, Berlin/ New York: Walter de Gruyter, Volume 2, 1986 [DHEI, Vol. 2 と略記]
- Lipgens, Walter and Wilfried Loth (eds.), *Documents on the History of European Integration*, Berlin/ New York: Walter de Gruyter, Volume 4, 1991 [DHEI, Vol. 4 と略記]

【欧語書籍】

- Buchanan, Tom and Martin Conway, *Political Catholicism in Europe, 1918-1965*, Oxford: Clarendon Press, 2002 (First edition, Oxford University Press, 1996)
- Forgarty, Michael Patrick, *Christian Democracy in Western Europe 1820-1953*, New York: Routledge, 2018 (First published in 1957, London: Routledge)
- Gehler, Michael and Wolfram Kaiser (eds.), *Christian Democracy in Europe since 1945*, London: Routledge, 2004

- Gerbet, Pierre, Gérard Bossuat, and Thierry Grosbois (dirs.), *Dictionnaire historique de l'Europe unie*, Bruxelles: André Versaille, 2009
- Heater, Derek, *The Idea of European Unity*, New York: St. Martin's Press, 1992 (田中俊郎監訳『統一ヨーロッパへの道』岩波書店, 1994年)
- Irving, Ronald Eckford Mill, *The Christian Democratic Parties of Western Europe*, London: George Allen and Unwin, 1979
- Kaiser, Wolfram, Brigitte Leucht and Michael Gehler (eds.), *Transnational Networks in Regional Integration: Governing Europe 1945-83*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010
- Laqueur, Walter, *Europe in Our Time: A History 1945-1992*, New York: Penguin, 1992 (加藤秀治郎ほか訳『ヨーロッパ現代史—西欧・東欧・ロシア』第1巻, 芦書房, 1998年)
- Lipgens, Walter, *A History of European Integration, Volume 1 1945-1947*, Oxford: Clarendon Press, 1982 (Translated from the German by P. S. Falla and A. J. Ryder). 原著は *Die An-gaenge der europaeischen Einigungspolitik, 1945-1950*, Erster Teil: 1945-1947, Stuttgart: Ernst Klett, 1977
- Lipgens, Walter (ed.), *Sources for the History of European Integration (1945-1955) : A guide to archives in the countries of the Community*, Leyden/London/Boston: Sijthoff, 1980
- Müller, Jan-Werner, *Contesting Democracy: Political Ideas in Twentieth-Century Europe*, New Haven and London: Yale University Press, 2011 (板橋拓己, 田口晃監訳『試される民主主義—20世紀ヨーロッパの政治思想』(上)(下), 岩波書店, 2019年)
- Smith, M.L. and Peter M. R. Stirk, *Making the New Europe: European Unity and the Second World War*, London and New York: Pinter, 1990

【欧語論文】

- Burgess, Michael, "Political Catholicism, European unity and the rise of Christian Democracy," in: Smith, M.L. and Peter M. R. Stirk, *Making the New Europe: European Unity and the Second World War*, London and New York: Pinter, 1990
- Deschamps, Etienne, "Démocratie Chrétienne", in: Gerbet, Pierre, Gérard Bossuat, and Thierry Grosbois (dirs.), *Dictionnaire historique de l'Europe unie*, Bruxelles: André Versaille, 2009
- Gerler, Michael, "The Geneva Circle of West European Christian Democrats", in: Gehler, Michael and Wolfram Kaiser (eds.), *Christian Democracy in Europe since 1945*, London: Routledge, 2004
- Gisch, Heribert, "The 'Nouvelles Équipes Internationales' (NEI) of the Christian Democrats: Introduction", in: *DHEI*, Vol. 4
- Kaiser, Wolfram, "Transnational Christian Democracy: From the Nouvelles Equipes Internationales to European People's Party", in: Gehler, Michael and Wolfram Kaiser, *Christian Democracy in Europe since 1945*, London: Routledge, 2004
- Kaiser, Wolfram, "Informal Politics and the Creation of the European Community: Christian Democratic Networks in the Economic Integration of Europe", in: Kaiser, Wolfram, Brigitte Leucht and Michael Gehler (eds.), *Transnational Networks in Regional Integration: Governing Europe 1945-83*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010

- Kulla, Werner, "Transnational Party Associations", in Lipgens, Walter (ed.), *Sources for the History of European Integration (1945-1955)*, Leyden: Sijthoff, 1980
- Pollard, John, "Italy", in: Buchanan, Tom and Martin Conway, *Political Catholicism in Europe, 1918-1965*, Oxford: Clarendon Press, 2002 (First edition, Oxford University Press, 1996)

【邦語書籍】

- 板橋拓己『黒いヨーロッパ』吉田書店, 2016年
- 黒澤隆文編訳『中立国スイスとナチズム—第二次大戦と歴史認識』京都大学学術出版会, 2010年
- 小島健『欧州建設とベルギー』日本経済評論社, 2007年
- 田口晃, 土倉莞爾編著『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』木鐸社, 2008年
- 土倉莞爾『西ヨーロッパ・キリスト教民主主義の研究』関西大学出版部, 2021年
- 中山洋平『戦後フランス政治の実験 第四共和制と「組織政党」1944-1952年』東京大学出版会, 2002年
- 西川知一『近代政治史とカトリシズム』有斐閣, 1977年
- 松本佐保『バチカン近現代史』中公新書, 2013年
- 松本佐保『バチカンと国際政治—宗教と国際機構の交錯』千倉書房, 2019年

【邦語論文】

- 小島健「欧州経済統合におけるトランスナショナル・ネットワーク—1950年代—」, 日本EU学会編『日本EU学会年報』第41号, 2021年
- 田口晃「キリスト教民主主義の歴史的位相」, 田口晃, 土倉莞爾編著『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』木鐸社, 2008年
- 野田昌吾「ドイツ・キリスト教民主同盟 (CDU)」, 田口晃, 土倉莞爾編著『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』木鐸社, 2008年
- 水島治郎「西欧キリスト教民主主義—その栄光と没落」, 日本比較政治学会編『現代の宗教と政党』早稲田大学出版部, 2002年
- 水島治郎「キリスト教民主主義とは何か—西欧キリスト教民主主義概論」, 田口晃, 土倉莞爾編著『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』木鐸社, 2008年